

# 別個の古代史『三国史記』と『三国遺事』\*

— 『古事記』・『日本書紀』との対照から—

朴正義\*\*

(e-mail: kannan322@hotmail.com)

---

## 目次

---

- I. はじめに
  - II. 中国中心の世界観『三国史記』
    - 1. 高麗王朝の正当性確立期『三国史記』
    - 2. 中国を上国とする『三国史記』
    - 3. 新羅を継承した『三国史記』
  - III. 仏教の普遍的世界の『三国遺事』
    - 1. 民族存亡期の『三国遺事』
    - 2. 王朝の継承を示さない『三国遺事』
    - 3. 仏教の普遍的世界観により自己確証した『三国遺事』
  - IV. おわりに
- 

## I. はじめに

純粹に民間伝承されてきたのではなく、国家または個人においても意図的に書かれた史書は、王朝を保障すべくその時代の人々を納得させうる世界観を模索し続けてきた。日本では、『古事記』がその理念である「天皇を中心」とする世界観をその時代に合わせ創造し、『日本書紀』は自国を「日本」としてアジアにおける位地を確保すべく世界観を創造した。このことは、神野志隆光氏がすでに明らかにしたところである。1)

さらに、『古事記』『日本書紀』、ともにその世界観は時代の要求に合わせ解釈されてきた。中世に入ると、天皇も仏教に帰依していた時代に合わせるべく、『日本書紀』神

---

\* 이 논문은 2015년도 원광대학교 교내연구비로 연구함

\*\* 圓光大学校 日語教育科 日本学 教授

1) 朴正義(2001)「天皇を保障した『古事記』」『日本学報』第46輯 韓国日本学会 p.373~387

代巻の注釈書である一条兼良の著『日本書紀纂疏』や、北畠親房の著『神皇正統記』は、仏教の普遍的世界観から「天竺・震旦・本朝」の三国からなる枠組みで世界を解釈した。<sup>2)</sup>また、近世は西洋の宇宙構造論が入って来た時代で、これに合わせるべく『古事記』の注釈書である本居宣長の『古事記伝』一七条巻附巻というかたちで、服部中庸の著『三大考』が寛政九年(1779年)に刊行された。これは、天=日、地=地球、泉=月として『古事記』の世界観を解釈した<sup>3)</sup>。このように、その時代時代を納得させるべく新しい世界観が創り出されてきたといえる<sup>4)</sup>。

韓国でも事情は同じで、中世に入り、『三国史記』『三国遺事』がそれぞれの時代を納得させるべく著された。1145年に『三国史記』が儒学者である金富軾によって編纂されたのに対し、それより136年遅れた1281年<sup>5)</sup>に『三国遺事』は僧である一然によって著れたもので、それぞれの時代状況かつ要求が異なるため、それぞれの時代的立場により世界観をそこに描いているといえる。

本論文は、『三国史記』と『三国遺事』の二つの史書が、『古事記』と『日本書紀』がそうであるように、全く別の理念(世界観)で著わされた別個の古代史であることを説くものである。

## Ⅱ. 中国中心の世界観『三国史記』

### 1. 高麗王朝の正当性確立期『三国史記』

高麗初期、その政治体制は豪族連合政権であったため、高麗王朝の王権は弱く、豪族間の力関係の均衡によってようやく王権が維持されていた。しかし、高麗王朝第四代目の光宗が王座につくとその様相は一変した。

光宗は、その生涯を豪族の粛清と王権強化に費やした。まず、奴婢按檢法の制定(956年)によって地方豪族の所有する奴婢化した良民を解放することによって、公民の数を確保し国家の収入源を拡大した。これは、豪族の経済力の弱体化を図るものでもあった。次に、中国式科挙制度の実施(958)によって、従来の閥族中心の閉鎖された人材登用制から脱皮し、一部有力豪族による官僚の独占を抑制した。さらに、文散階<sup>6)</sup>の設定と百官

2) 神野志隆光(1999)『古事記と日本書紀』 講談社現代新書 p.34

3) 金沢英之(1997)『宣長と『三大考』』(『国語と国文学』 第74巻 3号)東京出版局 p.39~53

4) 朴正義(2002)「日本神話における世界観の変遷」(日本文化学報第15輯)韓国日本文化学会 p.p.223~240

5) 『三国遺事』がいつ編纂されたか確かなことは分らないが、一般に一然70歳以後、京師に召されて国尊の称号を受けるまでの間(1275~1281)、即ち雲門寺にいたころの業績とされている。(金思煥(1997)『完訳 三国遺事』明石書店 p.p.4~6)

の公服制定(960年)により王を中心とする階級制度を確立し、豪族に対して絶対的な王の位地を確保した。これら一連の政策は、結果として豪族の弱体化とともに王権の相対的強化もたらした<sup>7)</sup>。その後975年に死ぬまでの15年間、王権に従わない反対勢力を建国功臣・宗親をとわず容赦なく肅清し、中央における権臣貴族の勢力を抑圧した。王権に対抗できるほどの有力豪族がいなくなるとともに、中央集権化と豪族の貴族化がはじまった。この時期、高麗の王はその称号を国内において皇帝とし、光徳・峻豊など独自の年号を使用した。光宗以後も貴族による反乱もあるにはあったが、『三国史記』が書かれた時期は王朝の位置は揺るぎない時代であった<sup>8)</sup>。即ち、国内的に安定していた時代であった。

次に国外的には、『三国史記』が書かれた1145年までの高麗の外交関係は、基本的に北方民族に対しては敵対し、中国宋に対しては友好関係を築くことであった。しかし、その外交政策はどこにも与さない主体的なものであった。ここに、当時の高麗王朝の対外政策を端的に示す重要な事件をいくつか挙げて見ることにする。

- ・ 10世紀末、契丹の太宗が駱駝を五十頭献上し通交を要請してきたが、拒否<sup>9)</sup>。
- ・ 985年に、契丹との戦いで宋から援兵を求められたが、拒否<sup>10)</sup>。
- ・ 986年に、契丹から高麗が宋と連合するのを防ぐため親善を求めてきたが、拒否<sup>11)</sup>。
- ・ 993年から1019年まで契丹によって三回も侵略を受け、不利になったときも契丹を上国として仕えることを拒否し、結果として契丹を撃退<sup>12)</sup>。
- ・ 金王朝が成立し、契丹を攻略するため、両国の和親を求めてきたが、拒否。この時、同時に宋は高麗を通じて金と連合し、契丹に対抗しようとしたが、拒否<sup>13)</sup>。

このように当時の高麗は、宋・契丹・金などの列強の中であって、中立的立場を堅持した。また、契丹の侵入を三回も撃退し、さらに、金に連れ行かれた皇帝徽宗・欽宗父子を救出してくれるよう南宋から要請もされている<sup>14)</sup>。このように高麗は弱小国家でなく、列強と張り合うだけの力があったことが確認できる。『三国史記』の時代は、高麗はどことも与みさず自国の主体性を確保しており、王朝は対外的にも安定していたといえる。

6)高麗の位階制度で、「高麗史」百官志に「文宗代に二十九階の文散階を定めた」とある。その後忠烈王一年(1275)には、元の干渉を受けて五品以上の名称を改めた。忠宣王即位年(1308)にはじめて正一品を置き、一品から九品までの正従が整備され、六品以下を郎とよんだ。その後も何度か変革されている。(李弘植篇(1992)『韓国史大事典』教育国書 p.556)

7) 河炫綱(1989)『韓国中世論』新丘文化社 p.7

8) 河炫綱(1989)『韓国中世史研究』一潮閣 p.p.109~122

9) 韓沽欣(1976)『韓国通史』學生社 p.150

10) 上掲書 p.151

11) 上掲書 p.151

12) 上掲書 p.p.151~156

13) 上掲書 p.168

14) 上掲書 p.169

高麗王朝の問題は、韓半島の支配者としてその正統性をいかに保障するかであった。高麗以前の王朝、新羅・高句麗・百濟の三国の王朝は、それらの始祖伝説から正統性が保障されているが、高麗王朝は地方の豪族出身で、その始まりは豪族連合の代表でしかなかった。つまり、高麗王朝独自の権威はなく、その正当性を保障するためには、他の権威を借りしかつた。ここで考えられるのが、中国の権威を借りること、もう一つはそれ以前に韓半島に成立した王朝の正当性を継承すること、によって自らの正統性を保障することであった。このような時、高麗王朝を保障すべき『三国史記』が編纂されたといえる。まさに、これが『三国史記』の主題である。

## 2. 中国を上国とする『三国史記』

『三国史記』は、高麗仁宗23年(1145)に刊行された現存する韓国最古の紀伝体正史である。しかし、河炫綱は「この史書の編纂に多くの人が参加したが、編纂の責任者である金富軾の史観が決定的な影響を与えている。即ち『三国史記』の史観はまさに金富軾の所産といえる」<sup>15)</sup>と述べ、史書としての信憑性を疑っている。周知のごとく金富軾は、『三国史記』を編纂するにあたって、儒教的な立場を強調した。今まで、金富軾の『三国史記』に対して多くの批判が提起されてきたが、その核心の一つがこの儒教的史観であった。崔南善がこの儒教史観を批判して『三国遺事解題』において、

(『三国史記』は)儒教からみて怪乱であれば抹削するのを躊躇せず、漢学上鄙野であれば変改することをためらわず、字句の組合わせのために伸縮と刪添を勝手に行き、好悪の情により剪裁を簡単に行い、その事実に忠実であろうとするよりむしろ文献に殉じて現相に即する主観に拘われているため、『三国史記』から国義的古史を徴わすことは不可能に属する観がある<sup>16)</sup>。

と、『三国史記』は正確な古代史とは言えないと述べている。後述する『三国史記』の本文に記載されている金富軾の史論<sup>17)</sup>でみられるように、主観によって語った古代史である。即ち、金富軾は儒教的史観によって新しい古代史を創り出したといえる。その中でも、中国を上国とする事大史観が今日までもっとも批判されているところである。

15) 前掲書 『韓國中世論』 p.95

16) 「儒教的으로 보아서 怪亂하다하면 抹削하기를 거리지 않고 漢學上으로 보아서 鄙野하다 하는 것이면 變改하기를 서슴치 않고 字句의 便을 爲하얀 伸縮과 刪添을 임의로 하고 好惡의 情을 因하얀 取舍와 剪裁를 예사로 하여 그 事實에 忠 하려 하는 것보담 차라리 文辭에 殉하고 그 原相에 卽하는 것보담 차라리 主觀에 拘하러 한 것이기 때문에 三國史記에서 國儀的 古史를 徴하러 함은 不可能에 屬한 觀이 있나니」(前掲書『韓國中世論』 p.95からの二次引用)

17) 『三国史記』卷第二十二 高句麗本紀 第十、『三国史記』卷二十八 百濟本紀 第六の最後の部分、高句麗と百濟が滅んだ記事にてでくる金富軾の史論を参照。

例えば、高句麗本紀に高句麗侵略対して出された隋煬帝の命令の記事が「22年の春2月。煬帝は高句麗討伐の詔書を下した」<sup>18)</sup>と記されている。この記事の中の「討」に注目したい。「討」は正義の軍隊を出動させて盗賊や外敵を征伐する意味を持つ字で、つまり、中国を中心とする天下に対して高句麗が齒向かったので、これを「討」つということである。これに対して、河炫網氏は「『三国史記』はその編纂に当たって韓国側の史料以外に、中国側の史料を多く引用している。即ち『三国志』『後漢書』『晋書』『魏書』『唐書』『新唐書』『通典』『冊府元龜』『資治通鑑』などに収録された三国の関係史料を引用する過程において、これらを自国の立場から消化できなかった例が多く見られる」とのべている<sup>19)</sup>。

しかし、中世に入った時期に自国の立場かまたは中国の立場か区別ができないほど、当時の学者の学問的レベルが低かったとは思われない。特に『三国史記』の編纂者たちは当時を代表する学者たちの集まりであったはずである。そして、すでに414年高句麗の長寿王によって建てられた『広開土王碑文』一面に、自国高句麗の立場から周辺国新羅や百済に対し「討」という字が使われている。つまり、『三国史記』編纂当時の学者が「自国の立場から中国の史料を消化できなかった」のではなく、「中国の立場で書いた」と、考えるべきである。

これに関しては、『三国史記』編纂当時の歴史的状況と時代的精神を注意して見る必要がある。当時、韓半島は中国文化圏の中にあつた。特に『三国史記』編纂当時、高麗の知識人たちは中国の先進文化を学ぶことに熱中していた。「進三国史表」に聖上陛下(高麗第17代仁宗)の言葉として記されている「今日、学士大夫は五経諸子の書と秦漢歴代の史を詳説する者はいるが、それに反し自国のことに関しては茫然としてその始まりも終りも知らないことは実に嘆かわしいことだ<sup>20)</sup>」に代表されるように、当時の時代精神は中国的価値観に支配されていた。この思想的背景として、事大主義が挙げられる。

また、『三国史記』は全編にわたって中国への朝貢の記事が載せられており、<sup>21)</sup>これからも『三国史記』が中国を上国視したことが確認できる。さらに、『三国史記』において、自国の「王」の死に対する漢字表記を見れば、より一層明確になる。

人が死んだとき、その位によって使われる字が異なる。即ち、「天子」―「崩」、

18) 『三国史記』卷二十 高句麗本紀 第八 「二十二年春二月。湯帝下詔討高句麗」

19) 「『三国史記』는 그 編纂 과정에서 한국 측의 史料 이외에, 중국 측의 史料를 많이 이용하고 있다. 즉 『三国志』『後漢書』『晋書』『魏書』『唐書』『新唐書』『通典』『冊府元龜』『資治通鑑』 등에 수록된 삼국의 관계 史料를 이용하는 과정에서 소화하지 못하고 있는 예를 자주 보게 되는 것이다」(前掲書『韓國中世論』p.97)

20) 『三国史記』進三国史表 「以爲今之學士大夫。其於五經諸子之書。秦漢歴代之史。或有淹通詳説之者。至於吾邦之事。却茫然不知其始末。甚可嘆也」

21) 崔書寧「日本에 있어서의 天皇의 絶對性과 現在」圓光大學校大學院 2008年度博士論文 p.205~218

「諸侯」一「薨」、「貴人」一「卒」、庶人一「死」である<sup>22)</sup>。『三国史記』や『三国遺事』と対照比較される『古事記』では、「崩」と「死」の二文字だけが使用され、「薨」と「卒」はみられず、「崩」は歴代天皇のみに使われた<sup>23)</sup>。暴君といわれた武烈天皇、神託を無視して死んだ中哀天皇にも、「崩」の字が例外なく使われている。このように一度「天皇」になった者にはその功績に関係なく、天下の支配者「天子」にだけ使用される「崩」の字を使用したのに反し、それ以外の者にはその功績に関わらず「薨」と「卒」の字を使わず「死」の字のみ使用することによって、天皇の絶対性を保障した。これは、天皇を世界の秩序とする『古事記』の世界観と合致するものでもある<sup>24)</sup>。また、『日本書紀』においても、天皇の死には「崩」の字が間違いなく使われている。<sup>25)</sup>

自国の王の死に対する漢字表記の違いは、『三国史記』と『三国遺事』の違いを端的にあらわしているものでもある。『三国史記』では調査結果「崩」は4個、「薨」は115個、「卒」は60個、「死」は60個であった。『三国遺事』は、中国の皇帝と同じく自国の王の死に関して、天子だけに使用する「崩」の字を使っている。<sup>26)</sup>

『三国史記』で「崩」は、湯王・唐太宗(文帝)・唐徳宗と中国の歴代の王のみに使われ、韓半島の歴代の王には基本的に「薨」を使っている。また、真興王王妃・王妃松氏のように王妃、東明王である朱蒙母の柳花と太后于氏にも王と同じ待遇をして「薨」を使用している。さらに、伽倻国の始祖の金首露王の十二代孫で三国統一を成し遂げた新羅の將軍の金庾信と、太宗武烈王の次男(文武王の弟)で、新羅の將軍として獐山城を築いて国を守り、外交家として羅唐連合軍の組織に成功した金仁文にも王と同じ「薨」を使っていることにも注目すべきである。しかし、「崩」の字が使われることはない。

また、太子や王妃に「卒」を使う場合もあった。「卒」を使った太子や王妃は、新羅十四代の真興王の息子の太子、炤徳王妃、新羅三十八代の元聖大王の息子の仁謙、新羅四十二代の興徳王の妃の章和夫人、新羅四十八代の景文王の王妃である文懿王妃である。この者たちは業績がないか、または早死したという共通点がある。

さらに、『三国史記』では百濟21代王である蓋鹵王のように「死」を使った例もある。蓋鹵王は、土木工事(宮廷の築造、土手の築造など)を行うことによって国力を疲弊化させ、最後には、高句麗の長寿王が送った謀者である僧道琳の計略によって、漢江流域一帯を奪われて虜になって殺害された。王という地位ではあったが、その行跡によって「死」の漢字表記が使用されたと推測される。

22) 禮紀 曲禮「天子死曰崩 諸侯曰薨 大夫曰卒 士曰不祿 庶人曰死」

23) 例外として「天皇」以外にも、景行天皇の皇子倭建命などに「崩」という字は使われているが、これは日本国土の完成などその功績甚だ大きく、天皇になるべき「天皇」に順ずるものとして使われた。しかし、これは例外中の例外である。

24) 崔書寧(2004)「『古事記』におけるの死の漢字表記」日本文化學報第 20 輯

25) 上掲書

26) 上掲書

即ち、『三国史記』は、「崩」という字を中国の皇帝にだけ使用し、自国の王に対しては「崩」より一段階下の「薨」という字を使用した。また、その行跡によっては、さらに「薨」より低い「死」を使用する場合もある。このように、『三国史記』における「死」の表記からも、中国を上国していることが確認できる。

### 3. 新羅を継承した『三国史記』

次に、『三国史記』において、高麗王朝がその正統性を保障すべくどの王朝を継承したかと記されているかである。太祖王建は『訓要十条』の中で旧百済の地域を「車嶺の南、錦江の外の山形地勢は背逆で、人心もこれに同じ」<sup>27)</sup>と述べており、三国の中でも百済は除外して考えるべきである。問題は、高麗王朝が高句麗または新羅のどちらの王朝を継承したかである。

高麗の前身である泰封時代、弓裔は高句麗の継承であることを標榜した。特に、高句麗を継承し建国した渤海が926年に契丹に滅ぼされた後、その意識はさらに強くなった<sup>28)</sup>。しかし、後三国を統一し韓半島唯一の支配者となった時点から、新羅王朝を正統と認識する歴史意識への転換が見られる<sup>29)</sup>。新羅は自ら進んで高麗に降服したため、新羅の支配階級はそのまま高麗の新しい支配階級として変身し、さらに高麗初期の思想界を新羅出身の儒教学者が握った。また、『三国史記』の編纂者金富軾も新羅王族出身の儒教学者であったことも無関係ではなかったと言える。

『三国史記』高麗本紀にある高句麗滅亡の記事に続いて、著者金富軾の史論が書き加えられている。これをみれば、

高句麗は秦漢の後から中国の東北の隅にあつて、その北隣はみな天子の司る所であつたが、世が乱れて英雄が起つていつわつて王と名乗る者がいる住むのに恐ろしい所であつた。そして、謙遜の気持がなくその地域を侵し奪つて互いに仇となつて、その郡県に入つて来て住んでいた。これがために兵禍がやむことなく乱れ、ほとんど平安な歳月がなかつた。その兵乱が東に移つてわが国におよぶのであつた。隋や唐の統一にあつてもそうであつた。高句麗は詔命に従わないで、むしろこれに反抗して(高句麗の)王は中国からの使者を土蔵に閉じ込め、頑として中国の帝威を恐れなかつた。そのような訳で、しばしば問罪の軍を起すようになった。あるときは奇兵を設けて大軍を陥落させたこともあつたが、終いには王は降服して国家が滅亡して後が絶えてしまつたのである。それで、その始めと終りをみれば、上下

27) 高麗の太祖が子孫に亀鑑として残した遺訓である訓要十条の中の第八条「車峴以南 公州江外 山形地勢 並趨背逆 人心亦然」。

28) 河炫綱(1975)「高麗時代の歴史継承意識」(李佑成・姜万吉(1976)『韓國의 歴史認識 上』創作 批評社 p.192~193)

29) 上掲書、 p.192~193

が和し人民大衆が睦まじければ、大国と言えどもよくこれを攻めとることはできなかった。しかし、国が不義で民が不仁で人民大衆が怨みをもてば、必ず崩壊して自ら振るわないものである。故に孟子は「天の時と地の利は、人の和にしかず」といっているし、左氏は「国が興るは福をもってし、その亡ぶは禍をもってする。国の興るは民を視ることあわれむ如くするはこれその福なり、その亡ぶるや民を土とあくたの如くするはこれその禍なり」といったが、この言葉は意味のあることである。

しかれば、およそ国を治める者が、暴吏の圧迫と虐待とそして強い王族たちの過酷な収奪をほしいままにして、人心を失って、治めて乱れず、存して亡ばないことを欲しても、それは酒を飲みながら酔いを憎む者どどこが違うだろう<sup>30)</sup>。

とあるように、編纂者金富軾が高句麗をどのように認識していたか理解できる。まず、「その北隣はみな天子の司る所であったが、世が乱れて英雄が起っていつわって王と名乗る者がいる住むのに恐ろしい所であった。そして謙遜の気持がなくその地域を侵し奪って互いに仇となって、その郡県に入って来て住んでいた」と、もともと天子すなわち中国の皇帝が治めるところであるが、世の乱れに乗じて高句麗は国を建てたと、国の成り立ちから問題し、高句麗の始まりを正統性のあるものとして認めていない。次に、「これがために兵禍がやむことなく乱れ、ほとんど平安な歳月がなかった」と、正統性のない高句麗は建国以来ずっと国内は乱れていた。

さらに、「隋や唐の統一にあたってもそうであった。しかし、高句麗は詔命に従わないで、これに反抗して王は中国からの使者を土蔵に閉じ込め、頑として中国の帝威を恐れなかった」と、中国に統一国家が成立してもこれに従わなかったとしている。中国を上国として従うべきなのに従わなかったと記しているのである。このため、612年に高句麗の乙支文徳將軍が隋の113万大軍を殲滅した薩水の大戦など、593年から648年までの隋4回唐3回の侵略を全て撃破した韓民族の輝かしい歴史的事実も、「あるときは奇兵を設けて大軍を陥落させたこともあったが」という表現にしかならない。つまり、中国に歯向かったのであるから、高句麗は滅びて当然の国であった、と『三國史記』は記すのである。そして、高句麗を最後に批評して「国が不義で民が不仁で人民大衆が怨みをもてば、必ず崩壊して自ら振るわないものである」「およそ国を治める者が、暴吏の圧迫と虐待とそして強い王族た

30) 『三國史記』卷第二十二 高句麗本紀第十 宝藏王下「高句麗自秦漢之後。介在中國東北隅。其北隣皆天子有司。亂世則英雄特起。潛竊名位者也。可謂居多懼之地。而無謙巽之意。侵其封場以讐之。其郡縣以居之。是故兵連禍結。略無寧歲。及其東遷。值隋唐之統一。而猶拒詔命以不順。囚王人於土室。頑然不畏如此。故屢到問罪之師。雖或有時設奇以陷大軍。而終於王降國滅後止。然觀始末。當其上下和、衆庶睦、雖大國不能以取之。及其不義於國、不仁於民、以興衆怨。則崩潰而不自振。故孟子曰。天時地利不如人和。左氏曰。國之興以福。其亡也以禍。國之興也。視民如傷。是其福也。其亡也。以民爲土芥。是其禍也。有味哉斯言也。夫然則凡有國家者。縱暴吏之驅迫、強宗之聚斂。以失人心。雖欲理而不亂、存而不亡。又何異強酒而惡醉者乎」。

ちの過酷な収奪をほしいままにして、人心を失って、治めて乱れず、存して亡ばないことを欲しても、それは酒を飲みながら酔いを憎む者とどこが違うだろう」と、高句麗王朝の正統性だけでなく、その行跡の不備を糾しているのである。

次に、百済の滅亡を記した『三国史記』百済本紀の最後の部分に、付け加えられた金富軾の史論に次のような記事が載せられている。

古史曰く、(略) 秦漢の乱の時、中国人が多く海東に逃れてきた。即ち三国の先祖は古聖人の遠い血筋で、国を受け継いで長い。百済の末期に至って所行の非道が多く、また世々代々新羅と仇敵になり高句麗と連合して新羅を侵略し、利に因り便に乗じて、新羅の重要な城と大きな鎮所をかすめ取ることをやめなかったのである。これは所謂仁親しみ隣国と仲よくする良策ではなかった。ここにおいて唐の天子は再び詔書を下て、その怨みを平げようとしたが、百済は表面では従うようなふりをし裏では違うことをして、大国に罪を得て滅んだのであるから、これは当然のことである。<sup>31)</sup>

これは、新羅を侵すことが中国を中心とする秩序を犯すことを意味し、そのため百済が滅亡する必然性があったと記すのである。ここで注目したいのは、「即ち三国の先祖は古聖人の遠い血筋」の部分である。この部分は、『三国史記』本文に載せられている三国の始祖伝説とは明らかに矛盾するものである。問題は、ここで古聖人とは誰かということになる。この時代は、既に述べた『三国史記』に載せられた聖上陛下(高麗第17代仁宗)の言葉<sup>32)</sup>からも分かるように知識人においても中国に対する知識がなく、また三国の始祖の前に歴史に登場する聖人は存在しない。このため「古聖人」は中国の古聖人としか考えられない。即ち、「三国の始祖が中国の古聖人の血を受け、国を受け継いだ」と語り、中国の聖人の血を受けたことによって韓半島の国々を権威づけているのである。

さらに、高句麗本紀の最後に載された金富軾の史論「しかし、高句麗はなお詔命に従わないで、これに反抗して、王は中国からの使者を土室に閉じ込め、頑然として、中国の帝威を恐れなかった」<sup>33)</sup>も、既に述べたように、高句麗が滅亡したのは上国中国に齒向かったためである。そして、この中国の権威を守った新羅が唯一韓半島の正統性のある国と『三国史記』は記すのである。

31) 『三国史記』卷二十八 百済本紀第六 義慈王條 「古史曰。百済與高句麗同出扶餘。又云。秦漢亂離之時。中國人多竄海東。則三國祖先豈其古聖人之苗裔耶。何其亨國之長也。至於百済之季。所行多非道。又世仇新羅與高句麗連和以侵之。因利乘便。割取新羅重城巨鎮不已。非所謂親仁善隣國之寶也。於是唐天子再下詔平其怨。陽從而陰違之。以獲罪於大國。其亡也亦宜矣」。

32) 『三国史記』進三國史表「以爲今之學士大夫。其於五經諸子之書。秦漢歷代之史。或有淹通詳說之者。至於吾邦之事。却茫然不知其始末。甚可嘆也」。

33) 『三国史記』卷二十二 高句麗本紀 第十 宝藏王下條「而猶拒詔命以不順。因王人於土室。其頑然不畏如此」。

金富軾の史論は、三国は全て中国聖人の後裔であるが、中国の聖人の後裔として正しく秩序を守ってきたのが新羅であるため、新羅が三国を統一することになり、さらに、新羅の末期、世の中が乱れたので、新羅王朝を継承するように高麗が成立した、と結論付けている。ここで、重要なのは新羅が自ら進んで高麗に降伏した、つまり進んで譲位したので、高麗が新羅の正当性を継承したと主張できるのである。即ち、唯一韓半島に中国から受け継いだ正統性を守った新羅王朝を継承したのが高麗王朝であり、このため新羅中心の古代史として『三国史記』は存在しなけりばならなかったと言える。

また、『三国史記』は、新羅本紀から始まり、高句麗本紀・百濟本紀へと続くように、三国の歴史を紀伝体で記している。つまり、三国の話である。しかし、三国が韓半島における最初の国ではなく、『三国史記』自体が三国以前の国について言及している。新羅本紀始祖赫居世居西干条「これより先、朝鮮の遺民たちは山谷にわかれて住み、六カ村を為していた」<sup>34)</sup>から古朝鮮らしき国の存在が確認される。さらに、同じく始祖赫居世居西干条に「居西干とは辰韓の言葉で王である」<sup>35)</sup>と辰韓が出る。これら以外にも馬韓・加耶などが記されているにもかかわらず、『三国史記』は三国から始まる。

古聖人の血を引くことによって三国を権威付けるのであって、それ以前の古聖人の血を引き継いでいない国は意味をなさないのである。このため、『三国史記』は韓半島の始まりを三国の歴史から記したと言える。ならば、三国以外の国が意味するところは何か。新羅本紀をみれば、加耶など周辺国は頻繁に出てくるが、「加耶を征伐する」<sup>36)</sup>という記事があるように、これらは新羅が成長する過程に征服すべき対象でしかない。

しかし、倭・日本に関しては、他の周辺諸国とは異なる。倭・倭人・倭国の記事が頻繁に出てくるが、ほとんどが倭からの侵略を撃退する記事で、倭まで出かけて征伐することはない、というより征服して国土に組み入れるという意図はどこからも読み取れない。そして、倭という対象が初期において定かでない。新羅祇摩尼師今十二年(123)に「春三月、倭国と講和した」<sup>37)</sup>とあるが、新羅阿達羅尼師今二十年(173)に「倭の女王卑弥呼が使者を使わし礼物をもって交際を求めてきた」<sup>38)</sup>という記事ある。すでに「講和」しているのに、「交際を求めてきた」のは明らかに矛盾する。初期において倭とは、大和(日本)政権を示したものとはいえず、海を渡ってくる者たちを網羅した総称といえる。頻繁に出てきた倭の記事が、炤知麻立干二十二年(500)の記事「倭人が長峯鎮を攻め陥した」<sup>39)</sup>を最後に、倭の侵略の記事がみられない。その後、本文の内容は、三国の争いに終始する。

34) 『三國史記』卷一 新羅本紀第一 始祖赫居世居西干條「先是。朝鮮遺民。分居山谷之間。爲六村」

35) 『三國史記』卷一 新羅本紀第一 始祖赫居世居西干條 「居西干。辰王」

36) 『三國史記』卷一 新羅本紀第一 祇摩尼師今條 「加耶寇南辺。秋七月。親征加耶」

37) 『三國史記』卷一 新羅本紀第一 祇摩尼師今條 「與倭國講和」

38) 『三國史記』卷二 新羅本紀第二 阿達羅尼師今條 「夏五月。倭女王卑弥呼遣使來聘」

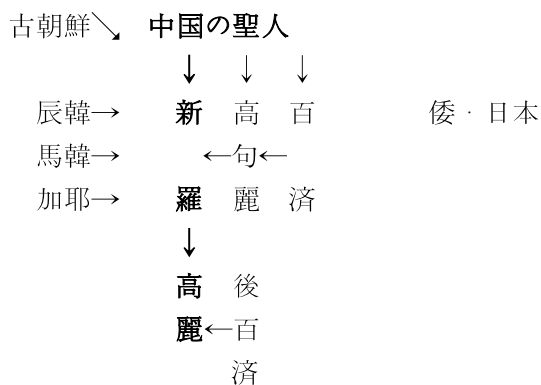
39) 『三國史記』卷三 新羅本紀第三 炤知麻立干條 「倭人攻陷長峯鎮」

次に倭が出てくる記事は、文武王竜朔三年(663)「倭国の水軍が来て、百済を助けた。倭船千隻」40)。文武王五年(665)「高句麗と結託して、倭国と通交して」41)。これらは新羅による統一期にあたる。そして、そこに出てくる倭国は大和政権を示していることは明白である。今までの、得たいの知れない倭ではなく、隣国としてその存在が確認される。その後、景德王元年(742)「冬十月に、日本の国使が来たが、これを受付けなかった42)」と、はじめて「日本」という表記がみられ、国使という表現も合わせて使われており、隣国としてその存在が確認されている。次に、哀莊王三年(803)「秋七月に、日本と修交して友好関係を結んだ43)」では、公式に日本を対等関係の隣国として認識することが確認できる。以後、頻繁に日本の記事が見られる。

百済本紀では、百済阿莘王六年(397)「夏五月、王は倭国と友好関係を結び44)」と、単なる侵略者でなく、隣国として存在していることが確認されるが、これは文武王五年(665)「高句麗と結託して、倭国と通交して」と同じく、新羅に歯向かう行為として後々確認される。高句麗本紀では、地理的な問題か、倭に関する記事は見当たらない。

『三国史記』は、倭・日本を『広開土王碑文』のように高句麗を中心とする世界の外におくのではなく、中国を中心とした世界の中においている。しかし、韓半島の国々は中国の古聖人の血を引くもので、その位地は日本より上にある。

『三国史記』は、中国中心の世界の中において、三国は全て中国に繋がり、その中でも中国の権威を守り韓半島の正当な覇者となった新羅を高麗が継承するという図式を描いている。



40) 『三國史記』 卷七 新羅本紀第七 文武王下條 「此時倭國船兵。來助百濟。倭船千艘」  
 41) 『三國史記』 卷六 新羅本紀第六 文武王條 「結託高句麗。交通倭國」  
 42) 『三國史記』 卷九 新羅本紀 第九 景德王條 「冬十月。日本國使至。不納」  
 43) 『三國史記』 卷十 新羅本紀 第十 哀莊王條 「秋七月。與日本國交聘結好」  
 44) 『三國史記』 卷二十五 百濟本紀 第三 哀莊王條 「夏五月。王與倭國結好」

### Ⅲ. 仏教の普遍的世界観『三国遺事』

#### 1. 民族存亡期の『三国遺事』

『三国遺事』が著わされた時期は、蒙古に侵略されはじめて属国として国の独立が犯されていた1281年である。即ち、国家・王朝というより民族<sup>45)</sup>自体の存続への欲求が激しくなった時期と言え、『三国史記』が書かれた時期と時代的要求が異なる。問題は、王朝の正統性の保障というようなレベルでなく、もっと根本から国家と民族を見直さなければならなかった。つまり、韓民族の存続自体が問われた時期であった。

『三国史記』編纂後『三国遺事』成立までの歴史的背景を簡略して述べれば、次のようになる。文臣に対し地位は低くまた待遇も劣悪であったのに不満を持った武臣は、鄭仲夫を中心として1170年反乱(庚寅の乱)を起こし武臣政権を打ち立てた。以後100年間武臣政権が継続した。しかし、互いの権力闘争によって政権の中心は目まぐるしく代わり、その間国内は乱れ高麗王朝の王権は形だけのものとなった。1196年崔忠献の政変によって、崔氏武臣政権が誕生し中央政治は安定し、蒙古の侵略によって崩れる(1258年)まで、約60年間継続した。しかし、この時代は蒙古の侵略とそれに対する抗戦につきる。『三国遺事』の著者一然(1206-1289)はまさにこの時代の人であった。

『三国遺事』が書かれた時期1275年から1281年は、蒙古との抗戦に破れ国家の正統性が崩れさった時期であった。しかし、最後に济州島まで場所を移してまで蒙古に対する徹底抗戦で見られるように、民族の存続を保つと言う信念が一番強い時期だったといえる。このような時、守るべき民族の存続価値そして正統性が問われたといえる。そこに、『三国遺事』の主題があった。このため、安易に『三国遺事』は民族主義によって著わされた、と現在に至るまで主張されてきた。しかし、この民族主義には疑問を呈したい。

#### 2. 王朝の継承を示さない『三国遺事』

『三国遺事』は、その著者一然をして「金富軾が著述した『三国史記』が儒教的な合理主義の歴史的叙述方式により、わが国の上古時代の神話的伝説を主観的に刪削改書したものに対し、自身はどこまでも神政時代の神話伝説を原型そのままに保存記述したものである」<sup>46)</sup>と言わせているほど、『三国史記』と比較し内容的に著しい相違をみせて

45) 「民族」というのは近代ヨーロッパによってつくられた言葉であり、『三国遺事』の時代の人には「民族」という言葉を使っていなかったのは確かである。しかし、『三国遺事』は、外に対して同じ歴史・文化を共有する共同体として韓半島の人々をえがいてい。そこに「民族」としての概念が存在しているものと判断し、「民族」という言葉を使用した次第である。

いる。ここでは、始祖における相違だけを簡単に述べることにする。

・古朝鮮一檀君

『三国史記』：記述なし

『三国遺事』：天帝桓因の子である桓雄の子<sup>47)</sup>

『三国遺事』では、桓雄は天降る時、天符印を与えられ、三千名を従え三危太白山に降り立つ。これは天の意志によって古朝鮮が開かれたことを物語るものである。

・高句麗一始祖朱蒙

『三国史記』：天帝の子解慕漱と河伯の娘との間に出来た子<sup>48)</sup>

『三国遺事』：天帝の子解慕漱と河伯の娘との間に出来た子<sup>49)</sup>

『三国史記』と『三国遺事』は内容が全く同じであるが、『三国遺事』の北扶余の条では解慕漱は天帝の子ではなく天帝となっており、五竜車に乗って天から降りて来ると記されている<sup>50)</sup>。ここでも、天の意志によって国が開かれたことを明確にしている。

・新羅一始祖朴赫居世

『三国史記』：馬の姿は忽然と消え、そこに大きな卵が残っていた<sup>51)</sup>。

『三国遺事』：馬は空に舞い上がり、そこに大きな卵が残っていた<sup>52)</sup>。

『三国遺事』では、馬が空に消えていくことから、赫居世が出てきた卵は空から降りてきたことを暗示し、人々も天子が天から降りて来たと言っている<sup>53)</sup>。また、赫居世は在位六十一年に天に戻る<sup>54)</sup>。さらに、元々いた六村の祖先が全て天から降って来たと言記されて

46) 民族文化研究所篇(1984)『三國遺事研究上』嶺南大學校出版部 p.4

47) 『三國遺事』卷一 紀異一 古朝鮮條「昔有桓因(謂帝釋也)庶子桓雄……雄乃假化而婚之孕生子號檀君王儉……」

48) 『三國史記』高句麗本紀「。得女子於太白山南優渤水。問之曰。我是河伯之女。名柳花。與諸弟出遊。時有一男子。自言天帝子解慕漱。誘我於熊心下。鴨渌邊室中私之。即往不返。……置於暖處。有一男兒。破殼而出。……扶餘俗語。善射爲朱蒙。故以名傳。……」

49) 『三國遺事』卷一 紀異一 高句麗條「。得女子於太白山南優渤水。問之云。我是河伯之女。名柳花。與諸弟出遊。時有一男子。自言天帝子解慕漱。誘我於熊心下。鴨渌邊室中知之。而往不返。……置於暖處。有一兒。破殼而出。……國俗謂。善射爲朱蒙。故以名焉。……」

50) 『三國遺事』卷一 紀異一 高句麗條「天帝降于訖升骨城(在大遼醫州界)乘五龍車。立都稱王國號北扶餘。自稱名解慕漱。……」

51) 『三國史記』新羅本紀 始祖赫居世居西干 「有馬跪而嘶。則往觀之。忽不見馬。只有大卵。……」

52) 『三國遺事』卷一 紀異一 新羅始祖赫居世王條 「有一白馬跪拜之狀。尋檢之。有一紫卵(一云青大卵)。馬見人。長嘶上天。……」

53) 『三國遺事』卷一 紀異一 新羅始祖赫居世王條 「時人爭賀曰。今天子已降。……」

おり55)、これも天の意志によって国が開かれたことを明確にしている。このように『三国遺事』は、三国の王朝すべてが天の意志によって開かれたとする。即ち、三国の始まりを『三国史記』のように中国と関係づけることはない。

ここで、『三国遺事』において、高麗が三国のうちどこを継承しているのかという問題である。一般的には新羅中心と言われているが、その理由として二つがあげられている。まず、紀異篇で新羅の歴代の王はほとんど記載されているが、高句麗や百濟の歴代の王の記載は数えるほどでただ王暦でその跡を知るだけである。これは、新羅関係の資料が高句麗よりも多く残されているのも重要な要因の一つであるが、一然の俗世は金氏でその出身は新羅系統で、また居住地域が新羅国があった慶尚道という個人的な事情も少なからず影響を与えた56)といえる。これらのことから、『三国遺事』も『三国史記』同じく新羅中心の歴史がそこに描かれていると主張されてきた。しかし、内容的に『三国史記』のように明確に新羅中心の歴史は見られない。

また、王暦第一東明王に「壇君の子である」57)とある。高句麗の始祖朱蒙を韓民族の始祖壇君の子と記すことは、高句麗を古朝鮮の継承とみることに繋がる。つまり、韓半島の支配者としての正統性は古朝鮮→高句麗とつながり、当然それを高麗が引き継がなければ、高麗王朝の正当性を示すことができない。しかし、高句麗継承も本文の内容において明確に示していない。

このようにどの王朝を継承したかは、『三国遺事』において明確でない。つまり、『三国遺事』にとって、王朝の継承は大きな意味を持たず、それが主題でもない。

### 3. 仏教の普遍的世界の『三国遺事』

『三国遺事』において檀君朝鮮の始りの記事を見れば、『三国遺事』古朝鮮条に「魏書」を引用して「與高(堯)同時」58)と、古朝鮮の檀君を中国伝説の聖帝堯と並列して記している。また、「古記」を引用して、「以唐高即位五十年庚寅。都平壤城(今西京)。始稱朝鮮」59)と、檀君朝鮮の始りを聖帝堯とほぼ同時期としている。『三国遺

54) 『三國遺事』卷一 紀異一 新羅始祖赫居世王條 「理國六十一年。王升干天。……」

55) 「天降った」と直接的には書かれていないが、六村の祖先すべて「峰や山に降り立った」と記されている。これは「天降った」と考えていいと思われる。(『三國遺事』卷一 紀異一 新羅始祖赫居世王條 「……一曰……初降于瓢崑峰。……二曰……初降于兄山。……」)

56) 前掲書『韓國中世論』p.103

57) 『三國遺事』王暦一 「高句麗 第一 東明王……壇君之子」

58) 『三國遺事』卷一 紀異一 古朝鮮條「魏書云。乃往二千載。有檀君王儉。立都阿斯達(經云。無葉山。亦云。白岳。在白州地。或云。在開城東。今白岳宮是)。開國號朝鮮。與高(堯)同時。(現代語訳)『魏書』にいうには、今から二千年前に檀君王儉がいて、都を阿斯達(経には無葉山といい、また白岳ともいっているが、これは白州にある。あるいは開城の東側にあるというが、今の白岳宮がそれである)に定め、国を開いて朝鮮と呼んだ。高(堯)と同じ時代だといっている。

事』は、「魏書」だけでなく「古記」まで引用して、中国の始まりと同時に古朝鮮檀君の存在を確認する。中国の影響でなく独自に成立した、つまり中国と対等である、と主張するのである。それ以後も、中国との関係は、中国を上国とすることなく対等である。これは、『三国遺事』に中国に対する朝貢の記事が見られないことから明らかである。60)さらに、中国の皇帝と同じく自国の王の死に関して、天子だけに使用する「崩」の字を使っている61)ことから理解できる。問題は、中国と対等であることを、『三国遺事』はどのように確証したのかである。

『三国遺事』は仏教関係の記事を多く載せているのがまず注目される。『三国遺事』は[王曆][紀異][興法][塔象][義解][神呪][感通][避隱][孝善]の九篇から構成されているが、その中で[興法]以下[孝善]までの七篇は全て仏教関係の記事で構成されている。そして、これら仏教関係の記事は一然の一貫した観点から整理されており、そこには自国中心の主体的立場から整理する努力が窺える62)。

こうした視点から注目すべきは、仏教発祥の地天竺と韓半島とが関連する説話が『三国遺事』に多く収録されていることである。『三国史記』に天竺に関する記事がないのとは大きな違いである。『三国遺事』が仏教という世界の中で、そこに示された世界が地域的にも拡大しているといえる。即ち、問題は中国と韓半島に極限するのではなく、全世界的規模で、国家・民族を『三国遺事』は語ったっているのである。ここに、『三国遺事』に載せられた天竺の記事のいくつかを紹介することにする。

まず、原宗興法の厭讎滅身条63)をみると、印度の高僧が韓半島の統一に力を尽くしたと記しており、印度が韓半島に関与したことを示す。さらに、帰竺諸師条64)の記事には、印度が遠い国の新羅を意識し、新羅を「髻説羅言貴也」と貴国と記している。何故、意識し貴国というのか。それを具体的に述べる記事が先ほど記した駕洛国記条65)にある。こ

59) 『三国遺事』 卷一 紀異一 古朝鮮條 「古記云。……以唐高即位五十年庚寅。都平壤城(今西京)。始稱朝鮮。(現代語訳)古記がいうには、……(王儉は)唐高(堯)が即位してから50年たった庚寅に平壤(今の西京)に都し、はじめて朝鮮と呼ぶ」。

60) 崔書寧 「『古事記』におけるの死の漢字表記」 『日本文化学報』 第20輯 韓国日本文化学会 2004年2月

61) 上掲書

62) 前掲書 『韓國中世論』 p.100

63) 『三国遺事』 卷三興法三 原宗興法條 「他方菩薩出現於世[謂芬皇之陳那浮石宝蓋。以至洛山五台等是也]。西域名僧降臨於境。由是併三韓而為邦。掩四海而為家。(現代語訳)他界の菩薩がこの世に現れて [これは芬皇寺の陳那と浮石寺の宝蓋。もって洛山の五台などをいう]、西域(天竺)の名僧が境内に降臨した。これによって三韓を併せて一つの国として、四海をおおって家とした」。

64) 『三国遺事』 卷四 義解五 歸竺諸師條 「天竺人呼海東云矩矩吒髻説羅也。矩矩吒言鷄也。髻説羅言貴也。(現代語訳)天竺の人は海東(新羅)を呼ぶのに矩矩吒髻説羅といったが、矩矩吒は鷄のことであり、髻説羅は貴のことである」。

65) 『三国遺事』 卷二 紀異二 駕洛國記條 「妾是阿踰陀国公主。(略)一作夢中。同見皇天上帝。謂曰。駕洛国元君首露者。天所降而俾御大宝。乃神乃聖。惟其人乎。且以新家邦。未定匹偶。卿等湏遣公主而配之。言訖升天。(現代語訳)私は阿踰陀国の姫である。

こには、皇天上帝が阿踰陀国(印度)の王の夢に現われ「駕洛国の王は天が命じたものだから、王女を嫁に送れ」と告げた記事がある。この記事に関連して、同じ駕洛国記条に、駕洛国の始祖首露が皇天上帝の命によって王となる記事<sup>66)</sup>が載せられている。この記事と前の記事が対応し、天竺と韓半島が皇天上帝の命によって結ばれ、国を創っていく物語が成立する。

さらに、塔像篇の皇竜寺九層塔条<sup>67)</sup>に、新羅の王の祖先を印度とする記事がある。これも印度と韓半島の王が血と仏教で結ばれていることを示している。これらは全て、仏教という一つの世界の中に印度と韓半島が共にあることを、語っているのである。

最後に、天竺関連の結論ともいえる記事が塔像篇の前後所將舍利条にある。

**『三國遺事』前後所將舍利条：**大教東漸。洋洋乎慶矣哉。讚曰。華月夷風尚隔煙。鹿園鶴樹二千年。流伝海外真堪賀。東震西乾共一天。<sup>68)</sup>

(現代語訳)大教(仏教)が東方へ広がってきたことは、限りなくめでたいことである。讚に曰く、「華月(中国)と夷風(東方)、互いに煙波を隔て、鹿園の鶴樹二千年を経たり。海外(東国)に流伝したことはまことに慶賀である。東震(東国)と西乾(印度)は一つの天を共にする」。

即ち、「東震(東国)と西乾(印度)は一つの天を共にする」と、韓国・(中国・)印度三国が一つの世界にあると語る。これは、日本が中世に持ち得た「三国世界観」と酷似するものである。

中世を代表する『日本書紀』の註釈書として一条兼良の著『日本書紀纂疏』がある。この『日本書紀纂疏』は当時流行していた三国世界観をそのまま受け入れ、そこに日本の位地を求めている。つまり、世界を天竺(インド)・震旦(中国)・本朝(日本)の三国は、それぞれ経(天竺)・漢籍(震旦)・神書(本朝)に記されているように各々別々の世界の始まりを持つが本質的には三国は一つの世界であり、それは経の説く宇宙論に基づく世界であることを確信し納得する仏教的世界観である。<sup>69)</sup>経(天竺)の説くところ、儒教・道教(震旦)のいうところ、『日本書紀』(本朝)で述べるところが同じということは、すべては

(略) 昨夜の夢の中で、皇天上帝にお会いした。(皇天上帝が)おっしゃるに、『駕洛国王の首露は天が降して王位に就かせたものであり、この人こそは神聖そのものである。新しく国を治めているが、未だ配偶者が決まっていない。卿達は姫を遣わしてその配偶者となさい』。言い終わると天に昇っていかれた」。

66) 『三國遺事』卷二 紀異二 駕洛國記條 「皇天所以命我者。御是處。惟新家邦。為君后。為茲故降矣。(現代語訳)皇天が私に命じるに、『ここに国を新しく建てて、(私にこの)君主になれ』。故に、いまここに降りてきたのだ」。

67) 『三國遺事』卷三 塔像四 皇龍寺九層塔條 「文殊又云。汝国王是天竺刹利種王。預受仏記。(現代語訳)文殊がまた云うに、『汝の(新羅の)国王は天竺の刹利種族の王で、かねてから仏記(仏の予言を記した文)を受けていた』」。

68) 『三國遺事』卷三 塔像四 前後所將舍利條

69) 前掲書「古事記と日本書紀」 p.p.38~41

一つの中にあるということである。天竺であれ、震旦であれ、同じ世界である。価値を共有する世界、普遍的世界といえる。その世界の中にあるものとして日本を位置づけるのである。70)さらに、吉田兼俱71)は『日本書紀纂疏』を基にして『日本書紀』神代巻を講釈した時に、聖徳太子の言葉として「仏教はもと神道という(本朝の)種子から出て(天竺で始まり)、文字という枝葉によってささえられ(震旦で)花開き、それが日本に戻った」と説き、むしろ価値の源は日本にあると主張した。

『三国遺事』においてどうであるか。先に述べた前後所将舍利条「仏教が天竺に興り、それが中国に伝わり、最後に韓半島に伝わった」は、一見仏教的世界の中でその価値の源泉を天竺とし韓半島を末端に位置づけているようであるが、古朝鮮の檀君の存在によってその位置は逆転する。即ち、古朝鮮が「桓雄(帝釈天の子)降臨」により開かれた仏教教化の世界の中に建国され、かつ檀君が帝釈天の孫であることを最初に確認した72)ことで、仏教的世界での価値の源泉として天竺・中国に対し自分たちの立場を主張するのである。檀君が桓雄の子即ち桓因(帝釈天)の孫であることが、ここで意味をもつ。

さらに、『三国遺事』義湘伝教条の記事を見れば、次のように書かれている。

**『三国遺事』義湘伝教条：**儼前夕夢。一大樹生海東。枝葉溥布。來陰神州。上有鳳巢。登視之。有一摩尼宝珠。光明属遠。73)

(現代語訳)智儼が前日の夜夢をみると、海東(韓国)に大樹が生えて枝と葉が茂り、それが延びて神州(中国)を蔽い、その上に鳳の巢があった。登ってこれを見ると、一個の摩尼宝珠があり、その光明が遠くまで照していた。

「海東(韓国)に大樹が生えて枝と葉が茂り、それが延びて神州(中国)を蔽い、その上に鳳の巢があった」との話は、それまでの仏教的世界の中心だった中国に変わって、韓半島が中心になることを暗示するものである。これは新羅時代の話とされているが、その後中国が元に征服されることにより、中国の仏教的世界での中心的地位が崩壊したという歴史的事実を踏まえ、高麗時代に作り直された説話ともとれる。

これ以外にも、『三国遺事』には仏教の中心地が天竺・中国から韓国に移ることを暗示する説話が、多く収録されている。例えば、「皇竜寺丈六条」74)に、仏教の発祥地

70) 前掲書「古事記と日本書紀」 p.p.44～46

71) 吉田兼俱(かねもと)(1435—1511)神祇官の家である卜部氏から出て、その家学を大成し、吉田神道を確立したもの。

72) 朴正義(2007)「三国遺事が語る世界の始まり」 日本文化学報 34輯 韓国日本文化学会

73) 『三国遺事』 卷第四 義解第五 義湘伝教条

74) 『三国遺事』 皇龍寺丈六條：未幾。海南有一巨舫。來泊於河曲縣之絲浦。檢看有牒文云。西竺阿育王。聚黃鐵五萬七千斤・黃金三萬分。將鑄釋迦三尊像。未就。載舫泛海而祝曰。願到有緣國土。成丈六尊容。并載模樣一佛二菩薩像。……南閩浮提十六大國・五百中國・十千小國・八萬聚落。靡不周旋。皆鑄不成。最後到新羅國。眞興王鑄之於文仍林。像成。……後大德慈藏西學到五臺山。感文殊現身授訣。仍囑云。汝國皇龍寺。乃釋迦與迦

印度において造ることができなかった仏像が、さ迷ったあげく仏教発祥1300余年後、新羅に到り完成するという記事がある。印度で完成できなかった仏像が新羅でようやく完成されたということは、仏教隆盛の地として印度より韓半島が適切な地であることを示すものである。さらに、仏教発祥以来さ迷ったあげく新羅に到着したのは、新羅が最初からその適地であることを示すものでもある。また、「前後所將舍利條」<sup>75)</sup>に、天から仏の齒が中国にもたらされたが、道教の隆盛とともに無用となり捨てられようとしたところ、それを高麗人が本国に持ち帰り伝えたという記事がある。仏教の隆盛としての中国はすでに失われ、その中心が韓国に移ることを暗示した説話といえる。

このように、『三国遺事』は仏教の世界の中に自国を位置づけることによって、将来仏教の中心地が天竺から中国そして韓半島へ移り、韓半島は未来永劫にわたって仏に護られる国となることを主張している。仏教的世界の源泉であるという主張も、これら全て、韓半島を帝釈桓因の孫檀君が最初に開いたことによって意味を持つ。

天竺の始まりは記されていないが、中国の始りは「堯帝」という語により、堯帝が名を連ねる三皇五帝<sup>76)</sup>を踏まえて『三国遺事』に示されている。韓国・中国・天竺は別々にじまり

葉佛講演之地。宴坐石猶在。故天竺無憂王。聚黃鐵若干斤泛海。歷一千三百餘年。然後乃到而國。成安其寺。蓋威緣使然也[與別記所載不同](現代語訳)まもなく南の海から巨船一隻が、河曲県の糸浦に来て停泊した。(船の中を)検げてみると、公文があって、(そこに)「西竺(印度)の阿育王が、黄鉄五万七千斤と黄金三万斤を集めて、釈迦三尊像を鑄造しようとしたが完成できなかったので(仕方なく)船に載せて海に浮かべてますが、願わくば因縁のある国土にいて、丈六尊が完成できますよう。一の仏像と二つの菩薩像の模型も併せてのせる」と書かれてあった。……それを船に載せ、海に浮かべて南閩浮提(南方の印度国)十六大国と、五百中国、十千の小国、八万の村落をくまなく回ったけれども、みんな鑄造に失敗した。最後に新羅国に到着した。真興王が文仍林において鑄造して完成し、(仏像の)相好(顔付き)も完備した。……その後、大徳(高僧)の慈藏が西方に留学し五台山に至ると、文殊が現身して秘訣(秘密の方法)をくれながら、こうたのんだ。「汝の国の皇竜寺は釈迦と迦葉仏が講演したところの地であって、宴坐の石がなおも残っている。故に天竺の無憂王が黄鉄若干斤を集めて海に浮かべ、一千三百余年をへた後に、はじめて汝の国(新羅)に到着し、その寺を完成させた。思うにこれは偉大な因縁がそうさせたのである」。

75) 『三国遺事』前後所將舍利條：崇奉左道。時國人傳圖讖曰。金人敗國。黃巾之徒。諷日官奏曰。金人者佛教之謂也。將不利於國家。議將破滅釋氏。坑諸沙門。焚燒經典。而別造小舡。載佛牙泛於大海。任隨緣流泊。于時適有本朝使者。至宋聞其事。……密授佛牙。……使臣等既得佛牙來奏。於是睿宗大喜。奉安于十員殿左掖小殿。(現代語訳)左道(道教)を崇奉するようになった。その時、国の人が「金人が国を滅ぼす」という凶讖(予言)を伝えた。黄巾(道教)の徒が日官(氣象庁の役人)を動かして「金人というのは仏教をいうのであって、将来国家にとってよからぬものとなるでしょう」と申し上げた。(そのため)朝廷の議論は釈氏(仏教)を破滅させ、經典を焼き、別に小さい船を造って、それに仏牙を載せて大海に浮かべ、どこなりとも勝手に行かせようとした。その折、ちょうど本朝(高麗)の使者が宋に来ていて、その事を聞き付け、……こっそり仏牙をもらいうけた。……(高麗)の使臣達はその仏牙をえてから帰ってきて(そのことを)申し上げた。そこで睿宗が大いに大喜び、(それを)于十員殿の左側の小殿に奉安した。

76) 三皇五帝は、中国の最初の世襲王朝夏の以前の時代とされる神話伝説時代の帝王で、三皇は神、五帝は聖人としての性格を持つとされている。三皇は、以下のような5説がよく知られている。天皇・地皇・泰皇(人皇)(『史記』秦始皇本紀)、伏羲・神農・黄帝(西晋・皇甫謐『帝王世紀』)、燧人・伏羲・神農(『礼緯含文嘉』一『風俗通』皇霸篇に引く)などの諸説がある。五帝は、まとまった記

発展するが、仏教が最後に韓半島に伝教することにより、つまり「大教(仏教)が東方へ広がってきたことは、限りなくめでたいことである」を受けて、「東震(東国)と西乾(印度)は一つの天を共にする」と仏教のもとに世界は一つになるのである。

中国の存在を無視することによってはじめて高句麗を中心とした世界観を確立させた『広開土王碑文』77)、中国中心の世界に入ることによって自国を保障した『三国史記』78)。どちらにしても中国から自由ではなかったが、『三国遺事』は仏教という普遍的世界観の中ではじめて中国に対し自由でいられ、中国を中心とする世界観から抜け出た世界観を確立することができたといえる。

『三国遺事』は、元の侵略による国家存亡期に、仏教の普遍的世界の中で自らの存在を確証した。

#### IV. おわりに

現在の歴史書も、今の時代を保障し未来への方向性を示すべく、そこに虚偽を含む。このことは、金日成一金正日体制を保障すべく書かれた北朝鮮の歴史書79)を例に挙げるまでもなく、韓国においても軍事政権時代の歴史教科書を見れば一目瞭然であろう。時代時代によって歴史書の記述が変化するのはこのためである。過去に遡れば遡るほど、それは顕著といえる。

『三国史記』は、中国を中心とする世界観のもとに、中国の正当性を受けた新羅を継承する事によって、高麗王朝の正当性を確証した。『三国史記』の主題は、王朝の正当性を保障することであったと言える。それに反し、『三国遺事』の時代は、蒙古に侵略され、王朝の正統性の保障というようなレベルでなく、もっと根本から国家と民族を見直さなければならなかった。つまり、韓民族の存続自体が問われた時期であった。そこに『三国遺事』があったといえる。『三国遺事』の主題は、仏教の普遍的世界観のもとに、仏教的世界での価値の源泉として天竺・中国に対し自分たちの立場を主張する自己確証であった。

---

録としては、司馬遷の『史記』であり、黄帝・顓頊・帝嚳・堯・舜となっている。これ以外に小昊・顓頊・帝嚳・唐堯・虞舜(『帝王世紀』)などの説があるが、ともかく、堯帝は伝説上の聖君としてあらわれある。

77) 『広開王碑文』にあらわれる天下観においては、中国は存在せず、そこには百濟・新羅をはじめ高句麗に支配される国々だけが存在する。

78) 朴正義「韓日古代神話と中世神話にあらわれた世界観の比較」『日本文化学報』12輯 韓国日本文化学会 2002年 p.p.283~287

79) 1866年金日成主席の曾祖父金膺禹先生はじめピョンヤンの人民、『シャーマン』号を大同江に撃沈(鄭晉和編(1992年)「朝鮮史年表」雄山閣 p.45)

このように二つの史書は、それぞれの時代の要求によって、それぞれの世界観のもとに、古代史を作り出してきた。『三国史記』と『三国遺事』の古代史は噛み合わないにもかかわらず、この二つを合わせ韓国の古代史を形作ってきた。即ち、日本で『古事記』と『日本書紀』を張り合わせて古代史を創り出してきた過ちを、韓国の古代史においても冒すものである。さらに、韓日古代史を語る時、日本側の資料『古事記』『日本書紀』、韓国側の資料『広開土王碑文』『三国遺事』『三国史記』は、お互いの資料が噛み合わず、むしろ韓日古代史を混乱させている結果を招来している。互いを対照することによって、古代史を解明することはできない。

古代東アジアは、中国王朝が世界の中心であるという価値観即ち中華思想の基に秩序が保たれ、それを統括していたのが中国の皇帝である。その政治機構が冊封制度で、この冊封制度とは中国国内の封建制度を周辺諸国まで拡大したもので、周辺諸国の君主が中国皇帝に朝貢することによって皇帝から臣下として「王」「公」「候」に冊封される制度をいう。これには朝貢の義務が課せられるが、冊封され臣下になることによって諸国の君主たちは中国を中心とする世界においてその地位が保障された。古代の韓国と日本も中国の冊封制度の中にいたと中国の歴代の史書に記されている。つまり、中国皇帝のもとに、諸国の君主が互の関係を保つことによって秩序が維持された世界観である。

しかし、中国を中心とする世界観は外の問題で、東アジアの諸国は内にある中国から独立した世界観を模索し続けてきた。特に東アジアの当時の先進国であり現在にまでその国体を維持してきた韓国・日本は、それが顕著といえる。これを現在にまで物語っているのが、日本では『古事記』『日本書紀』、韓国では『広開土王碑文』『三国遺事』『三国史記』である。これらの書は確かに歴史書としての形式を保ってはいるが、書かれた時期の国家の理念を完成するのを目的として記されており、つまり書かれた当時の国家の保障と永遠の繁栄を祈念すべく書かれたものといえ、そこに語られているのは正確な古代史とは言い難い。さらに、それぞれ編纂された時代の相違から歴史に対する要求がことなり、それぞれ別々の古代史を作り上げてきたといえる。神話を「一元的な神話論」<sup>80)</sup>で考えてきた過ちを改め「多元的な神話論」でもって考えなければならぬように、「史書」も「多元的な歴史論」として見なければならぬ。少なくとも古代中国文化の影響下にあった東アジアではそうである。

80) 過去の神話研究方法というのは、元々一つの神話というものが存在し、それからいろいろな神話が派生したことを前提とする一元的な神話論に基づくものであった。つまり、『古事記』に現れた神話も『日本書紀』に現れた神話もまた他の神話も、元々同じ神話でありかつ同じ意味を持つものとして考え、さらに『古事記』神代全体としての意味を考えるのではなく、部分部分それぞれに独立した意味があると考えるものである。このため『古事記』神代を解釈するにおいて、それと似かよった他の神話例えば『日本書紀』神代などの部分部分を引用し、さらに他国の神話まで引用するなどして、本来『古事記』が持つ意味を大きく離れ、結果として新しい神話を作り出してきたと言える。これに対し、全て別々の神話と見る「多元的な神話論」が主流となってきた。

## 【参考文献】

- ・神野志隆光(1999)『古事記と日本書紀』 講談社現代新書
- ・金思燁(1997)『完訳 三国遺事』明石書店
- ・李弘植篇(1992)『韓国史大事典』教育国書
- ・河炫綱(1989)『韓國中世論』新丘文化社
- ・河炫綱(1989)『韓國中世史研究』一潮閣
- ・韓祐欣(1976)『韓國通史』學生社
- ・李佑成・姜万吉(1976)『韓國의 歴史認識 上』 創作 批評社
- ・民族文化研究所篇(1984)『三國遺事研究上』嶺南大學校出版部

### ◎『三国遺事』(年代順)

- ・崔南善訳『三国遺事』崔南善 民衆書館 1954年8月
- ・崔南善編『増補 三国遺事』瑞文文化社 1999年2月(1954年8月)
- ・姜仁求・金杜珍・金相鉉・張忠植・黄湏江訳『註釈三国遺事』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ(韓国精神文化研究院) 以文化社 2003年

### ◎『三国史記』(年代順)

- ・井上秀雄訳『三国史記1・2・3・4』平凡社 1980・1983・1986年
- ・金鍾權訳『新完訳 三国史記上・下』明文堂 1988年6月

## 要 旨

『三国史記』の問題は、対外的なものでなく、あくまでも国内において高麗王朝の正統性をいかに保障するかであった。このため『三国史記』は、中国を中心とする世界観のもとに、中国の正当性を受け継いだ新羅を継承した国として、高麗王朝の正当性を確証した。『三国史記』は歴史をそのように著わした。

それに反し、『三国遺事』の問題は、王朝の正統性保障というレベルでなく、蒙古に侵略され国家民族の存亡の危機に際し、国家民族をいかに保障するかという対外的なものであった。『三国遺事』には、仏教発祥の地天竺と韓半島が関連する説話が多く収録されている。即ち、『三国遺事』は、仏教という世界のもとで中国は勿論天竺までいれた世界的な視野で、国家民族を保障しようとしたのである。これは、日本が中世に持ち得た「三国世界観」と酷似する。日本の「三国世界観」は、天竺・震旦・本朝それぞれの世界の始りの知識をもつなかで、「天竺・震旦・本朝はその世界の始りは異なるが、仏教という一つの世界にある」と語るのがそれである。『三国遺事』も、「東震(東国)と西乾(印度)は共に一つの天なり」(前後所将舎利条)と韓国・中国・印度三国が同じ世界あると語り、仏教の普遍的世界観の中で自己の存在を確認するのである。『三国遺事』は歴史はそのように著わした。

このように、『三国史記』と『三国遺事』は、別々の世界観の元に著わされた古代史といえる。つまり、別々の古代史である。それにもかかわらず、現在も『三国史記』と『三国遺事』を張り合わせて、韓国古代史を創り続けている。これは、日本において『古事記』と『日本書紀』を張り合わせ日本古代史を創造してきた誤りを踏襲するものである。

キーワード：三国史記・『三国遺事』・仏教の普遍的世界観・『古事記』・『日本書紀』

투 고 일 : 2015. 5. 31

심 사 일 : 2015. 6. 13

계 재 확 정 일 : 2015. 7. 4